

2016年11月9日(水)16:00~17:30  
臨床心理学コース昼間M1原簿

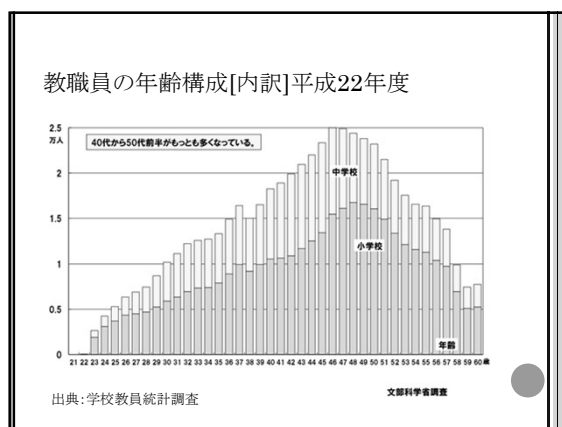
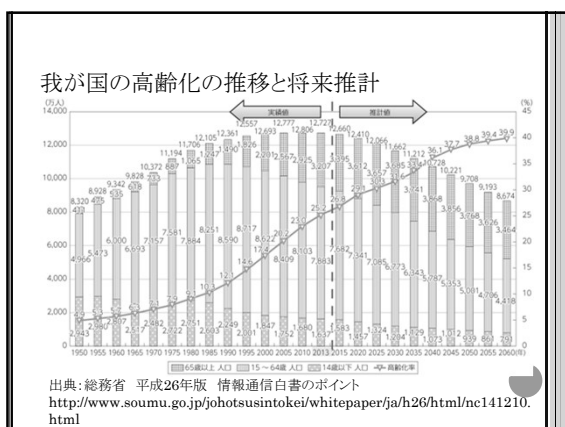
野田ゼミ  
第5回 原簿発表

**小中学校教員のメンタルヘルスと現場で求められるソーシャルサポート関連要因について**

Web調査システム構築による質問紙法のICT化に向けて  
<http://junhara.net/nodasemi/>

2015年には高齢者人口約3400万人

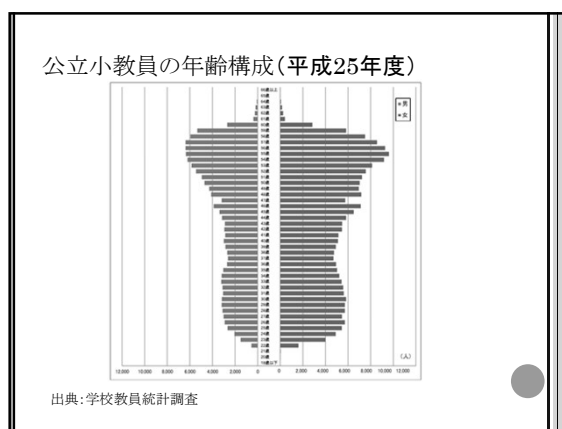
- 高齢者人口は今後、いわゆる「団塊の世代」(昭和22(1947)~24(1949)年に生まれた人)が65歳以上となる平成27(2015)年には3,395万人となり、「団塊の世代」が75歳以上となる37(2025)年には3,657万人に達すると見込まれている。



公立小中学校教員の年齢構成の推移

小学校					中学校				
年度	20代	30代	40代	50代	年度	20代	30代	40代	50代
19.0	39.8	35.1	21.1	39.8歳	19.0	24.5	34.3	19.3	21.9
4	17.7	39.1	23.7	17.5	4	20.6	39.0	21.5	18.8
7	14.4	35.8	33.0	18.8	7	15.9	40.9	26.1	17.1
10	10.7	30.8	39.6	19.9	10	13.9	37.8	31.8	16.5
13	7.8	26.5	41.3	24.4	13	10.5	32.3	38.0	19.3
16	8.8	23.8	38.3	29.8	16	8.7	27.3	40.8	23.2
19	11.3	20.7	32.6	35.3	19	9.7	24.1	38.1	28.2
22	13.3	20.4	27.8	38.4	22	11.3	22.1	32.6	34

出典:学校教員統計調査



### 問題は、平均年齢の低下自体ではなく、教員年齢構成の不均衡

- 第2次ベビーブーム世代が学齢期に達した1980年前後、児童生徒の増加に対応するため大量の教員が採用されました。この大量採用層がずっと教員平均年齢を押し上げてきたのですが、現在この層が定年退職時期を迎えており、その穴埋めのため新規採用層が大幅に薄まっています。当初小学校は高卒の教員は、**大量採用の分厚い50代のベテラン層、そのおかげで極端に数が少ない40代と30代後半の中堅層、再び増えている30代前半から20代の若手層**という「**ひょうたん型**」のアンバランスな構成になっているのです。
- 民間企業も含めて組織の**中堅層**には、業務の裏質の中心を担うだけでなく、世代間ギャップの大きい**ベテランと若手の間を仲介する役割**があります。ところが学校現場では、中堅層が主任クラスになって非常に多忙なうえに数が少ないため、若手の面倒をとりベテランと若手の橋渡しをしつづけることに手が回らず、その結果、**若手教員の孤立**という状況が一部で起きているとも指摘されています。
- また指導力のある教員は、視線やしぐさだけで騙している子どもたちを鎮めることができますが、このような指導技術はある意味「職人技」とも言えます。講義などで伝えることは難しく、現場の長い経験の賜の上から下の世代へと受け継がれていくような継承の技術です。しかし、**ベテラン層の若退職により、これらの日常的な指導技術が若手教員に継承されず、失われる可能性**がある。教育関係者間で懸念され始めています。

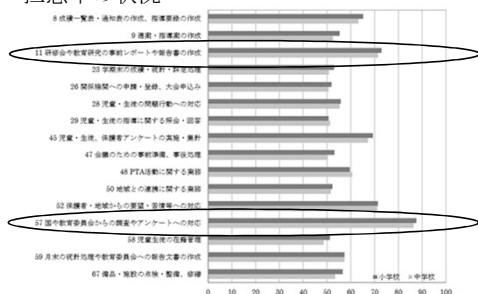
出典：ベネッセ教育情報サイト  
<http://benesse.jp/kyouiku/201409/20140908-1.html>

### 学校現場を取り巻く状況と教員の多忙化

- 急激な**少子高齢化**が進行し、**グローバル化**の進展に伴う国際競争が激化する中、新たな価値を創造し国際的に活躍できる人材や、多様な文化や価値観を受容し共生していくことができる**人材の育成**
- 地域コミュニティの衰退、共働き世帯や一人親世帯の増加、世帯当たりの子供の数の減少**といった様々な背景の中で、家庭や地域における子供の社会的育成機能が弱まっているとの指摘があり、**家庭や地域における教育が困難**な状況
- 変化の激しい社会**の中で生き抜く子供を育成するためには、時代の変化に対応して、子供に様々な力を身につけさせることが必要であり、子供が自ら課題を発見し、解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習の充実など、**授業革新**を図っていくことが求められる。
- 教育内容や学習活動の量的・質的充実への対応にとどまらず、**土曜授業、道徳教育の充実や小学校での外国語活動**など、学校は様々な教育課題への対応が求められている。
- いじめや暴力行為**等の問題行動の発生、**特別な支援**を必要とする児童生徒数の増加、**不登校**の児童生徒の割合の増加など学校現場を取り巻く環境は複雑化・困難化するとともに、学校に求められる役割は拡大・多様化しており、**保護者への対応、通学路の安全確保、地域活動**などへの対応も求められている。

出典：文部科学省 学校現場における業務改善のための ガイドライン 2015

### 教諭の従事率が50%以上の業務に対する負担感率の状況



出典：文部科学省 学校現場における業務改善のための ガイドライン 2015

### ソーシャルサポートとは

- ソーシャルサポートは、コミュニティ心理学のキャプラン (Caplan, G)により提唱された概念である。
- 生活において、他者から与えられるさまざまな物質的、心理的援助のことを指し、道具的・情動的サポートと情緒的サポートとに大別される。
- 「道具的・情動的サポート」は物質的援助で、さらに下位分類として、問題解決のための実際の資源を提供する「直接的サポート」と、解決のための情報を提供する「間接的サポート」の2種類に分けられる。
- 「情緒的サポート」は、ストレス状態にある個人に対し、他者が共感的、受容的に接することで支えていこうとするような態度を指す。愛情、親密性などといった情緒面への働きかけと、評価やフィードバックなどの認知面への働きかけという2種類に分類される。
- ソーシャルサポートには、ストレスを緩和し、精神的健康状態を良好にする作用があることが分かっており、また、危機介入において重要なポイントとなるとされている。

出典：心理学用語集 サイコタム  
<http://psychoterm.jp/applied/clinical/f3.html>

### ソーシャルサポートにまつわる用語

用語	意味
社会的ネットワーク	それぞれにサポートを交わすであろう個人の集合体
情緒的サポート	共感、安心、愛着、尊敬の提供
情動的サポート	問題解決の助けと助言
道具的サポート	日常生活でのサービスや仕事による援助
評価的サポート	自己評価に関連するフィードバック
予期されたサポート	将来、必要となった場合、利用可能であると認識されているサポート

### 職務ストレスとメンタルヘルスとの関係 (先行研究)

- 職務ストレスとメンタルヘルスとの関係は、職場での仕事荷重が重いほど、役割曖昧性や役割葛藤が大きいほどメンタルヘルスの状態は悪くなるということが実証されている。たとえば渡辺 (1986a)はメンタルヘルスの状態を測定する指標として心身傾向、うつ傾向、不安傾向を用い、うつ傾向の症状は、他の症状よりも組織環境におけるストレス(仕事荷重、役割曖昧性、役割葛藤)とより密接に関連していることを報告している。(渡辺,1986a)。
- サポートの効果について、援助する側とされる側の一致(不一致)による違いは明らかにされていない。援助される側の望んでいるサポートが供給されない場合のサポートの効果、援助する側とされる側の関係性(例えば、援助される側の心情や状況を、する側がどの程度理解しているか、など)がサポートの効果に与える影響などを明らかにしていく必要がある。また、「どんなサポートでも迷惑ということはありません」という記述に象徴されると思われる教員特有の考え方がサポートの効果にどのような影響を与えるのかを明らかにすることも必要である。(森・三浦,2005)

## ソーシャルサポート尺度の例

### ○ 情緒的サポート

- 1. 仕事で落ち込んでいるとき、励ましてくれる
- 2. 軽い話から、カタイ話まで話し相手になってくれる
- 3. 仕事の問題で困っているとき、どうすればいいか相談ののってくれる
- 4. 個人的な心配事や不安があるとき、どうすればいいか親身になってくれる
- 5. おりあるごとに声をかけてくれる
- 6. 仕事があまくやれたときは、正しく評価してくれる
- 7. あなた自身のことをかっけてくれたり高く評価してくれる
- 8. あなたの能力を評価し、認めてくれる

### ○ 道具的サポート

- 9. 仕事にいかせる知識や情報を提供してくれる
- 10. 仕事の問題を解決するのにやり方やコツを教えてくれる
- 11. 仕事に関して信頼できるアドバイスをしてくれる
- 12. 一人ではできない仕事があったとき、快く手伝ってくれる
- 13. あなたに時間がないとき、済まさないといけない仕事をしてくれる
- 14. 仕事の負担が非常に大きいときに仕事を手伝ってくれる

出典:小牧 一裕, 職務ストレスとメンタルヘルスへのソーシャルサポートの効果, 健康心理学研究, Vol. 7 (1994) No. 2 p. 2-10

## 問題提起

- これまでの研究は、ソーシャルサポートとバーンアウトなど構成概念(因子)間における関連性についての分析を行うものが主流だった。その結果は、パラメトリックを前提とした相関係数や説明率で考察され、ジャーナルなどに掲載されることで完結していた。
- しかし、急激な社会構造変化とともに職種によって求められる具体的サポートは変遷し、かつ多様化している。また、特定の職種に限らず世代差、性差によって期待されるサポートのミスマッチがストレス要因になる可能性がある。いわゆる「大きなお世話」、「内向きのコミュニティ」
- このような状況下、調査対象者にできるだけ負担がなく、かつ、フィードバックの満足度が高い調査はできないだろうか。→そうだ！ノンバラでいこう！

## 目的

- 本研究では小中学校教員を対象にWeb調査によるソーシャルサポートとメンタルヘルス、とりわけストレスとの関連についてのパラメトリックな分析を行う。
- また、教員においての具体的なソーシャルサポートと思われる項目を独立変数とし、学校種別、世代差、性差を従属変数としてノンパラメトリックな分析を行う。
- 本調査に対する回答者負荷軽減と集計結果フィードバックに対する満足度を測定し、本研究の効果評定とする。

## 方法

- 予備調査(ノンバラ具体的サポート尺度の作成)
  - 自由記述によるWeb調査またはインタビューを逐語したテキストマイニング分析により、項目を洗い出す。
  - 20、30、40、50代を想定した「こんなサポートがほしい」
  - 項目について具体的サポートに対する「ほしい」「ほしくない」一対比較を想定したKJ法による検討とか。
  - 世代別に「喜ばれるサポートと思うか」をOn/Offで。(本調査?)
- 本調査
  - 従属変数: ストレス軽減効果(高群、低群)、受け手の属性(性差、世代差)
  - 独立変数: ソーシャルサポート尺度、ノンバラ具体的サポート質問項目
- アクセスの容易さ(アンケート調査依頼文の工夫)
  - 入力文字数の少ない検索キーワードの早期準備
  - 空メールの導入
  - QRコードの導入
- スマホ・タブレット対応の画面デザイン(可能な限りいつでもどこでも)
  - 一つの画面でマルチデバイス対応(HTML5&CSS3&jQuery Mobile)
  - タップ操作を想定(ラジオボタン・チェックボックス→トグルボタン)

## 参考文献

1. 総務省 平成26年版 情報通信白書
2. 厚生労働省 平成26年版厚生労働白書
3. 厚生労働省 平成27年版厚生労働白書
4. 文部科学省 平成22年度学校教員統計調査
5. 文部科学省 学校現場における業務改善のためのガイドライン 2015
6. 小牧一裕, 職務ストレスとメンタルヘルスへのソーシャルサポートの効果, The Japanese Journal of Health Psychology 1994, Vol.7, No.2, 2-10
7. 森慶輔・三浦香苗, 2005, ソーシャルサポートの効果についての探索的研究(2)一公立小・中学校教員の自由記述の分析をもとに, Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies, Showa Women's University, 2005, Vol.8, 58-67
8. 森慶輔・三浦香苗, 職域における短縮版ソーシャルサポート尺度の開発と信頼性・妥当性の検討—公立中学校教員への調査を基に—, Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies, Showa Women's University, 2006, Vol.1, No.9, 74-88
9. 貝川直子, 学校組織特性とソーシャルサポートが教師バーンアウトに与える影響(1), パーソナリティ研究 2009 第17巻第3号270-279
10. 金川裕, 2009, 教師のモチベーションとメンタルヘルスの関係, 不安と抑うつに焦点をあてて, 平成21年度学位論文, 兵庫教育大学大学院, 学校教育研究科, 学校教育学専攻, 臨床心理学コース

## ご清聴、ありがとうございました

- 中間発表までちょうど1か月。早めに抄録完成させて、サンドバック対策を充分しなげや。
- 次回は、抄録完成を目標に、予定演習レベルで発表してみます。

